

中國文化と日本文化

—「仁義」をめぐる—

深津胤房

一、まえがき

漢文に出てくる「仁義」という言葉を、日本では廣く使つて、「士・農・工・商」の四民ばかりでなく、「渡世人」の間
にまで使つて、大事な倫理・道徳にしている。廣く使われるに従つて、漢文本來の「仁義」からずれが出来ている。その
”ずれ“こそ、中國文化と日本文化の、人が見落としがちな、大きな違いであるが。

それで、中國本來の「仁義」と、日本通用の「仁義」とを、改めて見てみることにした。

二、漢語の「仁義」 — 仁心・義理 —

漢語は、單音節語である。それで、一語で、いつも、幅廣い意味を表わしている。その意味を、なんとか、限つてはつき
りさせようとする、それとかかわりのある語をそえて、二語にして表わして來た。「長短」(長さ)、「大小」(大きさ)と
言つたように。今、これにならつて、「仁義」の「仁」と「義」との意味を、それぞれ、限つてはつきりさせる為二語に

して表わすと、それは「仁心・義理」と言うことであつた。



「仁心」は、「人心」と書いたのと同じで、「人の心」である。それは、人の不幸を見るに忍びない心、人の不幸を聞くに忍びない心である。「獸心」や「禽獸之心」ではなく、まさしく「人心」である。『中文大辭典』に言っている。

△獸心▽謂居心不良、失却人性也。『史記、三王世家』「葷粥氏虐老獸心」。『列子、黃帝』「人未必無獸心。雖有獸心、以狀而見親矣。」

『禮記』に言っている。

今、人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎。夫唯禽獸無禮。故父子聚麀。(曲禮上篇)

「人心」は、人たる者がみんな持っている心であつた。『中文大辭典』に言っている。

△人心▽人之心意也。『公羊、文、二』「以人心為皆有之」。『列子、黃帝』「禽獸未必無人心。」

この「獸心」や「禽獸之心」と區別した「人心」を、漢文では特に「仁心」と書いた。

「人」と「仁」とは、同じ言葉であつた。『中文大辭典』に言っている。

△人▽與「仁」通。『釋名、釋形體』「人、仁也。仁、生物也。故『易』(說卦傳)曰「立人之道、曰「仁與義」。『廣雅、釋詁、四』「人、仁也」。『禮、表記』「仁者、人也」。『中庸』「仁者、人也。」

△仁▽人也。人心也。『中庸』「仁者、人也」。『孟子、告子上』「仁者、人心也」。『孟子、盡心下』「仁也者、人也」。『春秋繁露、仁義法』「仁之為言、人也。」

「仁」(仁心。人心)で大事なことは、「人を愛する心」であつた。『論語』に言っている。

樊遲問仁。子曰「愛人。」(顏淵篇)

『孟子』に言っている。

孟子曰「不仁哉。梁惠王也。仁者、以其所愛、及其所不愛。不仁者以其所不愛、及其所愛。」（盡心下篇）

「愛」は、「哀」と同じ言葉で、「かなしむ」「いとおしむ」ことである。「愛」がなまると、「惠」（めぐむ）ともなった。『中文大辭典』に言っている。

△愛▽○惠也。本作「恚」。『正字通』「愛、本作「恚」。『說文』「恚、惠也。从心、无聲」。○惜也。嗇也。『禮記、表記』「愛莫助之」。『注』「愛、猶惜也」。『孟子、梁惠王上』「百姓皆以王為愛也」。『注』「愛、嗇也。」

△哀▽○痛也。『呂氏春秋、禁塞』「亦可以悲哀矣」。『注』「哀、痛也」。○愛也。與「恚」通。『說文通訓定聲』「哀、段借為「恚」。『釋名、釋言語』「哀、愛也。愛乃思念之也。」

△惠▽愛也。『爾雅、釋詁』「惠、愛也」。『詩、大雅、民勞』「惠此中國」。『箋』「惠、愛也。」

「仁義」の「仁」は、「仁心」で、それは「人心」であった。「禽獸之心」ではない、「萬物の靈長である人の心」であった。「人らしい心」のことであった。それは、

愛。哀。惠。

であった。

いとおしむ。かなしむ。めぐむ。

と言った心であった。そう言った「人心」を、漢文では「仁心」と書いた。『中文大辭典』に言っている。

△仁心▽仁德之心。愛人之心。『孟子、離婁上』「今有仁心・仁聞、而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也」。

『集注』「仁心、愛人之心也。」

「人心」と言うと、「仁、人心也」のように、「獸心」「禽獸之心」と區別した。人の心“を指す場合と、別に”人民之心“を指す場合とあった。それで、特に「禽獸之心」と區別した。人の心“を指す場合には、「仁心」と書いていた。

「人」と言うと、“人民”を指し、「人心」と言って、“人民之心”を指す場合があった。『中文大辭典』に言っている。

△人√人民。與「民」通。『書、堯典』『敬授人時』。『漢書、律歷志上』『書』（堯典篇）曰“敬授民時”。『左氏、襄、三十一』『人生幾何』。『漢書、五行志、中之上』『民生幾何』。

△人心√人之心意也。『易、咸』『聖人、感人心而天下和平』。『孟子、滕文公下』『我亦欲正人心、息邪說、距詖行、放淫辭、以承三聖者』。『莊子、田子方』『陋於知人心。』

「人民之心」の「人心」は、險しくて、知りがたく測りがたいものであった。『中文大辭典』に言っている。

△人心如面√喻人心各各不同也。『左氏、襄、三十一』『人心之不同、如其面焉。吾豈敢謂子面如吾面乎。』

△人心險於山川√喻人心之險惡也。『莊子、列禦寇』『孔子曰“凡人心險於山川。難於知天”。』

△人心難測√謂人心不可探測也。『史記、淮陰侯傳』『常山王・成安君、二人相與、天下至驩也。然而卒相禽者何也。患生於多欲、而人心難測也。』



「義理」の「義」の字は、「從羊、我聲」であるから、「犧牲」の「犧」と同じで、“羊のいけにえ”である。「義理」の「義」となると、それは「宜」の字の意味である。「宜」は、“仲のよい”ことである。『詩經』の『國風』の詩に言っている。

(三) 桃之夭夭、其葉蓁蓁。

之子于歸。宜其家人。(周南、桃夭篇)

『小雅』の詩に言っている。

(三) 蓼彼蕭斯、零露泥泥。

既見君子。孔燕豈弟。

宜兄宜弟、令德壽豈。(蓼蕭篇)

『大雅』の詩に言っている。

(一) 假樂君子、顯顯令德。

宜民宜人、受祿于天。

保右命之。自天申之。(假樂篇)

「宜」は「誼」と同じで、「よしみ」のことである。『中文大辭典』に言っている。

△宜▽義也。與「誼」通。『說文通訓定聲』「宜、段借為「誼」」。『國語、晉語四』「將施於宜」。『注』「宜、義也。」

△誼▽○人所宜也。本作「諂」。與「義」同。『說文』「諂、人所宜也。从言宜、宜亦聲」。段『注』「誼・義、古今字。」

周時作「誼」、漢時作「義」。皆今之「仁義」字也。○恩誼也。『說文』「誼」、段『注』「今俗分別為「恩誼」字。乃

野說也。」

「恩誼」は「恩義」と同じ。「よしみ」のことである。『新編東方國語辭典』に言っている。

△恩義▽彼此以恩情・義氣、相結交。(民國六十五年一月初版、臺北市、東方出版社發行)

「仁義」の「義」は、それとかかわりのある語をそえて、二語で表わすと、「義理」と言うことであつた。「誼のすじ

道」である。「誼の道」である。『中文大辭典』に言っている。

△義▽○宜也。『論語、學而』「信近於義」。皇『疏』「義、合宜也」。○理也。『荀子、大略』「義、理也。」

△義理▽「義」亦理也。『管子、形勢解』「亂主之動作、失義理」。『呂氏春秋、明理』「不知義理」。『淮南子、泰族訓』

「背貪鄙、而向義理。」

「十義」という言葉がある。孔子の言葉であるが、大事な「義」(義理。よしみ)を数え上げて、「十義」と言っている。

『中文大辭典』に言っている。

△十義▽謂人倫之大者有十宜也。『禮記、禮運』「父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、

十者謂之十義。」

- 「父」が子に對する義理は、「慈」であった。
- 「子」が父に對する義理は、「孝」であった。
- 「兄」が弟に對する義理は、「良」であった。
- 「弟」が兄に對する義理は、「弟」であった。
- 「夫」が婦に對する義理は、「義」であった。
- 「婦」が夫に對する義理は、「聽」であった。
- 「長」が幼に對する義理は、「惠」であった。
- 「幼」が長に對する義理は、「順」であった。
- 「君」が臣に對する義理は、「仁」であった。
- 「臣」が君に對する義理は、「忠」であった。

「慈」は「いつくしむ」ことである。「孝」は「おやおもい」（親思い）である。「良」は「よい兄」である。「弟」は「おとなしい弟」である。「義」は「よしみ」である。「聽」は「言うことを聞く」ことである。「惠」は「めぐむ」ことである。「順」は「従う」ことである。「仁」は「人の心」である。「忠」は「心を盡くす」ことである。

❖ ❖ ❖
中國社會は、夏の禹王、殷の湯王、周の文王の三王の昔から、「仁義」を本としていた。「仁心」（ひとごころ）と「義理」（よしみ）を本としていたのである。『中文大辭典』に言っている。

△仁義√仁與義。

『禮、曲禮上』『道德・仁義、非禮不成』。『疏』『仁、是施恩及物。義、是裁斷合宜。』

『孟子、梁惠王上』「孟子對曰、王、何必曰利。亦有仁義而已矣」。『集注』「仁者、心之德、愛之理。義者、心之制、事之宜也。」

『荀子、勸學』「將原先王本仁義。」

『管子、中匡』「今言仁義、則必以三王³為法度。」

『史記、漢興以來諸侯年表序』「形勢雖彊、要之以仁義為本。」

三、國語の「仁義」―人情・義理―

『廣辭苑』に言っている。

△じんぎ▽〔仁義〕

① じっくりしみの心と道理にかなった方法。仁と義。

② 人の踏み行うべき道。世間の義理・人情。

③ 江戸時代に、博徒・職人・香具師^ヤ仲間に行われた親分・子分の間の道徳、及び初対面の挨拶。(第三版)

この三項目を、今、順に、見て行くことにする。



(1) じっくりしみの心と道理にかなった方法。仁と義。『徒然草』「君子に仁義あり。」

これは、ほぼ、漢語の用法に従っている。『中文大辭典』に言っている。

△仁▽親也。愛之也。『論語、顔淵』「樊遲問仁。子曰、愛人。」

△義▽○宜也。『釋名、釋言語』「義、宜也。裁制事物、使合宜也」。『論語、學而』「信近於義」。皇『疏』「義、合宜

也。○理也。『荀子、大略』「義、理也。」

△仁義▽仁與義。

『禮、曲禮上』「道德・仁義、非禮不成」。『疏』「仁、是施恩及物。義、是裁斷合宜。」

『孟子、梁惠王上』「孟子對曰、王、何必曰利。亦有仁義而已矣」。『集注』「仁者、心之德、愛之理。義者、心之制、事之宜也。」

『徒然草』の文は次の通りである。

その物に付きて、その物をつひやし損ふ物、數を知らずあり。

身に、虱“あり。家に、鼠“あり。國に、賊“あり。小人に、財“あり。君子に、仁義“あり。僧に、法“あり。(第九十七段)

「君子に、仁義“あり」と言った。「仁義」は、”君子“にとって、

その物(身)に付きて、その物(身)をつひやし損ふ物。

だと言った。

「仁義」は、「志士・仁人」、「君子」の重んずるところであった。『論語』に言っている。

子曰『志士・仁人、無求生以害仁。有殺身以成仁。』(衛靈公篇)

子曰「富與貴、是人之所欲也。不以其道、得之⁴不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道、得之不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。」(里仁篇)



(2) 人の踏み行ふべき道。世間の義理・人情。『永代藏、一』「世の仁義を本として」

「仁義」を「義理・人情」と解して、「人の踏み行ふべき道」とした。「義」を「義理」と解したのは、漢文の用法通りであ

る。『中文大辭典』に言っている。

△義理▽義亦理也。『史記、秦始皇紀』「明以義理」。『漢書、吾丘壽王傳』「苟以得勝為務、不顧義理」。『管子、形勢解』「亂主之動作、失義理」。『淮南子、泰族訓』「背貪鄙而向義理」。

「仁義」の「仁」を、「人情」と解して、「仁義」を「人の踏み行うべき道」とした。國語で「人情」と言うと、「人間が生まれつき持っている感情」を言う。『學研國語大辭典』に言っている。

△にんじょう▽〔人情〕人間が生まれつき持っている感情。とくに、愛情・思いやり・なさけなどの感情。「いくら傑作でも人情を離れた芝居はない」（夏目漱石、草枕）」

△にんじょうぼん▽〔人情本〕江戸時代末期に流行した小説の一種。江戸町人の戀愛・人情を主題とする風俗小説。為永春水が確立した。

國語の「にんじょう」（人情）は、漢語の「人情」と大きくずれている。國語では、とくに、愛憎・思いやり・なさけなどの感情。

を言っている。しかし、漢文では、

人之情欲・人之感情。

を言っ、具體的には、

喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲。

を言っている。『中文大辭典』に言っている。

△人情▽人之情欲也。人之感情也。

『禮、禮運』「何謂人情。喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲七者、弗學而能。」

『荀子、榮辱』「是人情之所同欲也。」

『管子、權修』「人情不二。」

「情」は、「心様こころさま」である。「心の動き様さま」である。「欲」をともなったものである。『中文大辭典』に言っている。

△情√人之陰氣。有欲者也。『說文』「情、人之含氣（陰氣）、有欲者。从心、青聲。『禮記、禮運』「何謂人情。喜怒哀・哀・懼・愛・惡・欲、七者弗學而能。」

『漢書、東平思王宇傳』「情亂其性」。『注』「情者、見物而動者也。」

『荀子、正名』「性之好惡・喜怒・哀樂、謂之情。」

『論衡、本性』「情、接於物而然者也。」

「仁」は、「獸心」（けもの心）や「禽獸之心」（とり・けもの心）でない「人心」（ひとごころ）である。それは、天の神様から與えられたもので、「理」をともなったものである。『中文大辭典』に言っている。

△仁√○人也。人心也。『中庸』「仁者、人也」。『孟子、告子上』「仁者、人心也」。『春秋繁露、仁義法』「仁之為言、人也。」

○心之本體、性也。理也。『論語、學而』「孝弟（孝悌）也者、其為仁之本與」。『集注』「程子曰、蓋仁是性也」。『上蔡語錄』「仁者、天之理。」

△仁√心之本體、性也」と言った「性也」の「性」は、「生まれつき」である。「性」は、天帝から與えられたもので、「善い」ものであった。古代中國人は「性善説」を取っていた。『說文』に言っている。

△性√人之易氣（陽氣）。性、善者也。从心、生聲。

段玉裁『注』「『論語』（陽貨篇）曰、性、相近也」。『孟子』（告子上篇）曰、「人性之善也、猶水之就下也。」

「仁」は、

人也。人心也。

心之本體、性也。理也。

と言われるもので、理性的なものである。それは、感情的な「人情」とは相反するものであった。この理性的な「仁」を、日本人は、感情的な「人情」で解して、「仁義」を「人情・義理」と取って、生活して来た。

「人情」には、「情欲」がともなう。『中文大辭典』に言っている。

△情欲√謂人情所貪欲也。又、謂男女之愛也。亦作「情慾」。

『列子、楊朱』「人不婚宦（結婚・仕宦）、情欲失半。」

『論衡、物勢』「情欲動而合、合而生子矣。」

理性的な「仁心・義理」であった「仁義」を、國語では感情的な「人情・義理」と取らえて来た。それが為に、「情義」（人情・義理）を命とする。やくざ仲間“に取り入れられて、その”倫理・道德“となった。



(3) 江戸時代に、博徒・職人・香具師^{しゃし}仲間に行われた親分・子分の間の道德、及び初對面の挨拶。現在も露天商人・遊び人などの間で行われている。「仁義をきる。」

『學研國語大辭典』では、この(3)の用法を次のように言っている。

(3) やくざ仲間などの社會に特有の道德・おきて。

「仁義をきる」と言うのは、「仁義」を守ります、と言いつ切る“ことである。

”命を懸けて、親分・子分の「仁義」を守ります。”

と、きっぱり言って、約束を誓うことである。『廣辭苑』に言っている。

△いいきる√「言いつ切る」

(1) 言いつ終える。(2) 斷言する。(3) □約束を守る。

四、「演歌」に見る「仁義」

「演歌」では、「仁義」を、『廣辭苑』の、ハじんぎ√〔仁義〕

(2) 人の踏み行うべき道。世間の義理・人情。『永代藏、一』「世の仁義を本として」の意味に使っている。「一九七三年十二月、序」の『日本の詩情』に演歌がのっている。この本は、阿部徳二郎・今井巖兩氏の共編で、全音楽譜出版社から出版されている。

『人生劇場』(昭・13) — 一九三八 —

佐藤惣之助 作詞

古賀政男 作曲

楠木繁夫 唄

(一) やると思えば、どこまでやるさ。

それが男の、魂たましいじゃないか。

義理がすたれば、この世は闇だ。

なまじとめるな、夜の雨。

(二) あんな女に、未練はないが、

なぜか涙が、流れてならぬ。

男ごころは、男でなけりや、

わかるものかと、あきらめた。

(三) 時世ときよ時節じせつは、變ろとままよ。

吉良の仁吉は、男じゃないか。

おれも生きたや、仁吉のように。

義理と人情の、この世界。



『ひばり仁義』(昭・46) — 一九七二 —

石本美由起 作詞

市川昭介 作曲

美空ひばり 唄

(一) ごめんなすって、皆々さまへ、

切った仁義に、嘘はない。

港、浜っ子、ハマそだち。

受けた情けは、かならず返す。

これが、これが私の、人生さ。

(二) 義理の深さに、くらべてみれば、

海は浅いよ、かもめ鳥。

肌も鐵火な、ハマそだち。

時と場合じゃ、自分を捨てて、

人を、人をたすける、楯となる。

(三) 丸い盃、笑って乾して、

酒に誓った、こころ意氣。

人情一輪、ハマそだち。

賭けた勝負にや、死んでも勝つが、

戀の、戀の涙も、知っている。「47年1月發賣」

五、「なざけ」と「よしみ」

「仁義」を、「世間の義理・人情」（廣辭苑へじんぎ）と言うと、「義」が「義理」にあたり、「よしみ」を指し、「仁」が「人情」にあたり、「なざけ」を指すことになる。

「義」は、「宜」と言うことで、「誼」（よしみ）のことである。「誼」と「義」とは、「古今字」で、周代には「誼」と書いていたが、漢代には、「義」と書くようになった。「誼」は「交情・友誼」を言い、「よしみ」のことである。『説文』に言っている。

△誼△人所宜也。从言宜。宜亦聲也。

段玉裁の『注』に言っている。

『周禮、肆師』（「凡國之大事、治其禮儀」）、『注』「故書」儀“為”義“。鄭司農云”義、讀為儀。古者書儀但為義。

今時所謂義為誼“。按此則「誼・義」古今字。周時作「誼」、漢時作「義」、皆今之「仁義」字也。其「威儀」字、則周時作「義」、漢時作「儀」。……云「誼者、人所宜」、則許謂「誼」為「仁義」字。今俗分別為”恩誼“字、乃野說也。

『中庸』云「仁者、人也。義者、宜也」、是古訓也。

修訂本『辭源』に言っている。

△誼▽○合宜的道理、行為。『楚辭』屈原『九章、惜誦』「吾誼先君而後身兮。羌衆人之所仇也」。○交情、友誼。如世交稱「世誼」、郷情稱「郷誼」。

従って、國語で「仁義」の「義」を、「義理」と取り、「よしみ」としたことは、よく当たっている。『廣辭苑』に言っている。

△よしみ▽〔好・誼〕

①親しいまじわり。親しみ。交誼。「―を結ぶ」、「―を通ずる」

漢文で重んじた「よしみ」（義。宜。誼）は、

父子之義、（父慈、子孝）。

兄弟之義、（兄良、弟弟）。

夫婦之義、（夫義、婦聽）。

長幼之義、（長惠、幼順）。

君臣之義、（君仁、臣忠）。

であった。『中文大辭典』に言っている。

△十義▽謂人倫之大者有十宜也。『禮記、禮運』「父慈、子孝。兄良、弟弟。夫義、婦聽。長惠、幼順。君仁、臣忠。十者謂之十義。」

「仁義」の「仁」を、「人情」と取り、「なさけ」としたものは、よくなかった。『中文大辭典』に言っている。

△仁▽人也。人心也。『中庸』「仁者、人也」。『孟子、告子上』「仁者、人心也」。『孟子、盡心下』「仁也者、人也」。『春秋繁露、仁義法』「仁之為言、人也。」

「仁」を「人也」と言った「人」は、「禽獸」に對するものであった。「人らしい人」のことである。「人心也」と言った

「人心」は、「禽獸之心」に對するものであった。「人らしい人の心」のことである。「仁」は、理性的なものであった。最新増訂本『辭海』に言っている。

△仁▽○親也。見『説文』。『中庸』「仁者、人也。親親為大」。○謂克勝私慾以全天理也。『論語、顔淵』「顔淵問仁。子曰、克己復禮為仁」。『集注』「仁者、本心之全德。」克、「勝也。」己、「謂身之私欲也。」復、「反也。」禮「者、天理之節文也。為仁者、所以全其心之德也。」

孔子が「仁」を説明して、

克己復禮。（「克勝私慾、以全天理」最新増訂本辭海△仁▽）

と言ったように、「仁」には感情的な「身之私慾」は許されないものであった。この理性的な「仁」を、ただ「なさけ」とすると、おのずと、漢文の「仁義」とずれが出てくる。『廣辭苑』に言っている。

△なさけ▽〔情〕

- ①人間としての心。感情。
- ②ものをあわれむ心。慈愛。人情。思いやり。
- ③みやびごころ。風流心。
- ④ふぜい。興趣。
- ⑤男女の情愛。戀情。戀ごころ。情事。

①②は、「仁義」の「仁」に当たっている。しかし、③④⑤になると、全くずれている。このずれた「なさけ」で、「仁義」を「なさけ・よしみ」として、「仁義」を重んずると、「やくざ」の「仁義」になる。

「仁」は「人心」（仁心）であったから、「人ごころ」と當てるべきであった。國語で「人ごころ」と言うと、そこに△なさけ▽の①②が入っている。『廣辭苑』に言っている。

△ひとごころ▽〔人心〕

①人の心。人間の精神。

②なさけ。人情。情愛。

「なさけ」の「なさ」は、「忍びなさ」の「なさ」である。『廣辭苑』に言っている。

△しのびない▽〔忍びない〕がまんできない。「聞くに忍びない」

『學研國語大辭典』に言っている。

△しのびない▽〔忍びない〕自分の氣持ちとして承知できない。がまんできない。しのびがたい。「その痛々しい青年の姿を見るに忍びないように、いそいでその傍を通り過ぎた。(堀辰雄、菜穂子)」

「なさけ」の「け」は、「懐しげ」の「け」である。『學研國語大辭典』に言っている。

△け▽《接尾》(形容詞の語幹、體言、動詞の連用形について、形容動詞の語幹、または名詞を作る)「……そうだ」「……のふうだ」「……らしいようす」などの意を表す。「唯、相手をいかにも懐しげに眺めながら、(堀辰雄、菜穂子)」

人の「忍びなさ」の「なさ」と並ぶ人の「け」は、「色け」の「け」である。『廣辭苑』に言っている。

△いろけ▽〔色氣〕

○異性の氣をひく性的魅力。「おてんばで、色けも何もない」

○女っ氣。「色け抜き會」

○異性に對する關心・欲求。性的感情。「色けが付く」、「年頃になって色けが出てきた」

國語では、「いろけ」は、人として大事なことだった。『徒然草』の第三段に言っている。

萬よろずにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうさうくしく、玉の唇さかすまの當あたなき心地せこぞすべき。

人の苦しんだり、悲しんだりしているのを見るに忍びない、聞くに忍びない心と、異性に見せる色けとを、日本人は、人と

して欠くことの出来ない大事な心情だとして、これを「なさけ」と言って来た。そこで、日本語の「なさけ」の中には、「人心」「慈愛」の外に、「風雅」「風情」「情愛」と言ったものが大きな幅を占めている。『廣辭苑』に言っている。

△なさけ▽

③みやびごころ。(風雅)。

④ふぜい。興趣。

⑤男女の情愛。戀情。戀ごころ。情事。

「仁義」の「仁」を、こうした「風雅・風情・情愛」の意味を持った「なさけ」で取ったから、「仁心・義理」の「仁義」が、「人情・義理」の「仁義」になってしまった。「仁義」が「人情・義理」となったから、

博徒・職人・香具師仲間に行われた親分・子分の道德。

となり、「仁義」を切る」という言葉が生まれた。

六、むすび

漢文で「仁義」と言うと、「仁心」と「義理」のことを言った。「仁心」は「人心」と言うことで、「人ごころ」である。「義」は「誼」と言うことで、「よしみ」である。「人心」は、「獸心」(けもの心)や「禽獸之心」(とりけもの心)でない、「人の心」である。「仁義」の「仁心」は、「人を愛しむ心」である。人の不幸を見るに忍びない心、人の難儀を聞くに忍びない心である。『中文大辭典』に言っている。

△仁心▽仁徳之心、愛人之心。『孟子、離婁上』「今有仁心・仁聞、而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也」。『集注』「仁心、愛人之心也。」

「愛人之心」は、「不忍人之心」であり、「惻隱之心」である。人の不幸や難儀を見るに忍びない、聞くに忍びない心である。人の不幸や難儀を傷み哀しむ心である。『中文大辭典』に言っている。

△不忍人之心▽對他人之同情心。惻隱之心也。『孟子、公孫丑上』「人皆有不忍人之心。」

『孟子』に言っている。

孟子曰「人皆有不忍人之心。……所以謂人皆有不忍人之心者、今、人乍見孺子將入於井、皆有怵惕・惻隱之心。……

由是觀之、無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。……惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。」（公孫丑上篇）

「仁」は「人心」（ひとごころ）で、「愛人之心」、「不忍人之心」、「惻隱之心」であった。人の理性的な心情であった。それに、國語では「なさけ」を當てた。「なさけ」と言うのは、「忍びなさ」の「なさ」と、「色け」の「け」とを合わせたものである。人の感情的な心情である。それで、「なさけ」と言うと、

△なさけ▽

①人間としての心。

②ものをあわれむ心。

③みやびごころ。

④ふぜい。

⑤男女の情愛。（廣辭苑）

と言った心情を表わした。これで「仁義」の「仁」を取ったので、「仁義」が「人情・義理」となった。そこで、感情的な道徳・倫理になった。

「義理」は「誼理」のことで、「よしみ」である。『中文大辭典』に言っている。

△誼理▽即「義理」。『漢書、母將隆傳』「舉錯不由誼理。」

古い中國で重んじた「よしみ」(義、誼。義理、誼理)は、

父子之義、— 父慈、子孝—。

兄弟之義、— 兄良、弟弟—。

夫婦之義、— 夫義、婦聽—。

長幼之義、— 長惠、幼順—。

君臣之義、— 君仁、臣忠—。

であった。この「義」が、「仁心・義理」の「義」であった。理性的な”人の大通り“ (人路) であった。『中文大辭典』に言っている。

△義√人路也。『易、說卦』「立人之路、曰仁與義」。『孟子、告子上』「義、人路也。」

しかし、我が國で、「仁義」を切ったり、「仁義」を誓ったりした人々の「義」は、「父子・兄弟・夫婦・長幼・君臣」の「義」ではなく、「親分・子分」の「義」であった。親分と子分との間の、感情的な「よしみ」(好・誼) であった。

(注)

(1) 『禮記』の『大學篇』に言っている。「故治國在齊其家。『詩』(國風、周南、桃夭篇) 云、

桃之夭夭、其葉蓁蓁。

之子于歸、宜其家人。

”宜其家人“、而后可以教國人。”

(2) 『禮記』の『大學篇』に言っている。「故治國、在齊其家。……『詩』(小雅、蓼蕭篇) 云、

宜兄宜弟。

”宜兄宜弟“、而后可以教國人。”

(3) 『中文大辭典』に言っている。△三王√謂夏之禹王、殷之湯王、周之文王。又一說、文王・武王併之為一。『孟子、告子下』「五霸、三王之罪人也。『注』「三王、夏禹、商湯、周文王、是也」。『集注』「夏禹、商湯、周文武也。」

(4) 孔子が言っている。「子曰”飯蔬食、飲水、曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲“。」(論語、述而篇)

(本学客員教授)